

さて、今回のターゲットは…
みその、二十七歳。
童顔ぽうちやりのまさに警戒心の
薄そうなフオアグラ鴨だ。

「旦那さんを見返すことを目標に
ダイエットプログラムを
始めましょうー！」

「はいっー
よろしくお願ひしますー！」

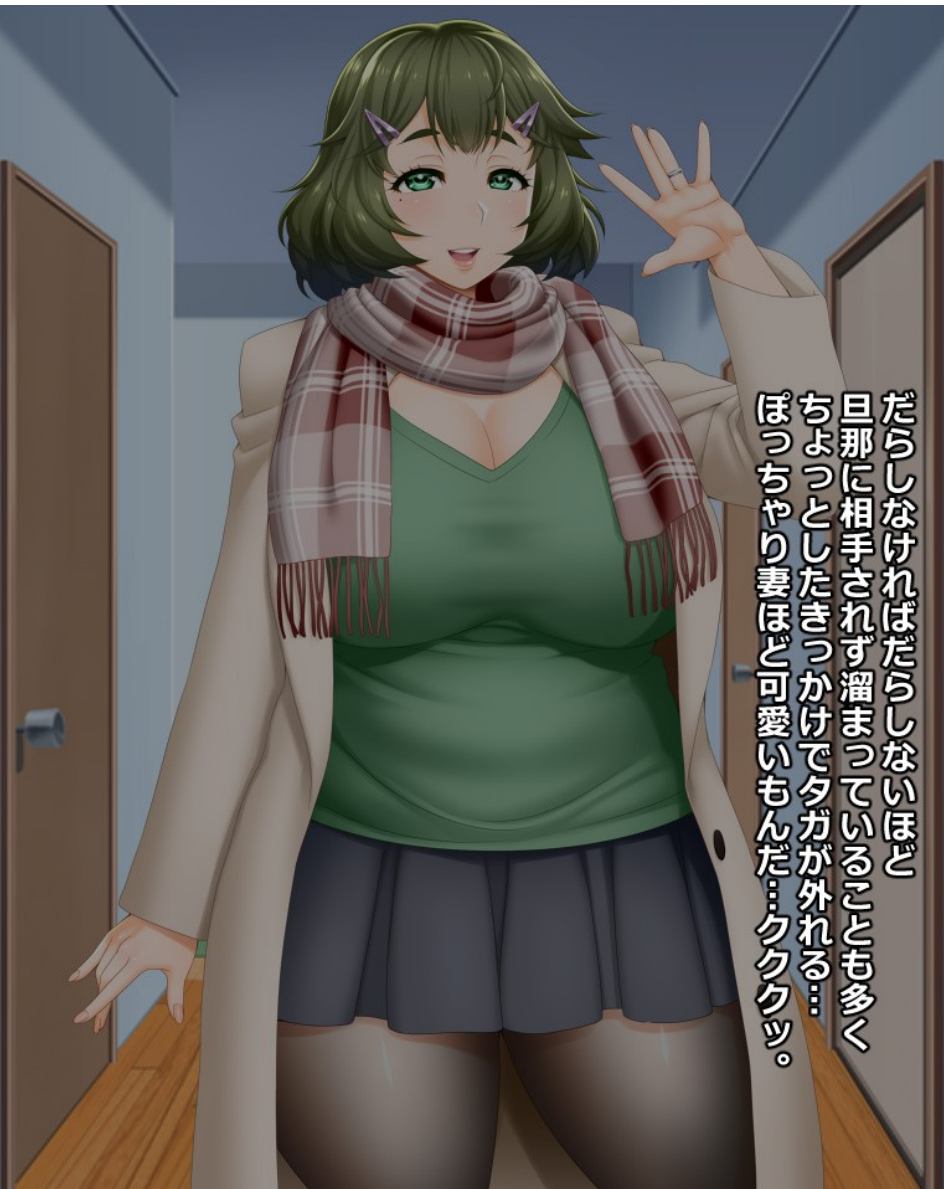
ダイエットモニターの罠に嵌った
お肉大好き
ぽちや妻 みその 27歳

人妻にダイエットは付き物だ。
ダイエットモニターの依頼は後を絶たない。

締まりのない体は警戒心もゆるく
俺にとっては格好のカモだ。

だらしなければだらしないほど
旦那に相手されず溜まっていることも多く
ちよつとしたきっかけでタガが外れる…
ぼつちやり妻ほど可愛いもんだ…クククッ。

さて、今回のターゲットは…
みその、二十七歳。童顔ぼつちやりの
まさに警戒心の薄そうなフオアグラ鴨だ。



申し込み時のアンケートには
糖質制限ダイエットを実践したが
あまり効果を感じず応募に踏み切った…
と書いてあった。ククッ、なるほどな…。



大方、巷の流行に飛びつき、思うように
痩せないことに業を煮やしている…
それで格安ダイエットモニターに応募…
といった単純性が窺える。まさに力モだ。

だったら、今回はその悩みに絡めて
体を使ったトレーニングに持ち込めば…
股間の肉汁が止まらなくなるに違いない。

早速みそのが住む部屋の玄関に立ち
俺はインターホンを一度鳴らした。
しかし、しばらく待ったが誰も出てこない。

(おかしいな。外観から見たときには
この部屋のリビングは明るかったのに...)

予約完了の通知は届いているはずだ。
メールボックスにキャンセルメールもない。

(10分早かったのがまずかったか?)

と、もう一度インターホンを鳴らすと
バタつく人の気配と受話音がピツと鳴った。

『...はい、ごちそう様ですか?』

「ご応募頂いたみそのさんですね？
依頼を受けたトレーナーのトシと申します」

インターホンに向かって名乗ると
扉の向こうからパタパタと足音が聞こえ
ガチャッとドアノブが回る。そして…

「お、お待ちしてましたあ…すみません
まだ時間あると思って、その…
っ、つい、自分の時間に没頭してしまって…
あっ、ど、どうぞ上がってくださいっ」

息を弾ませ上気した顔の女が
ドアを大きく開け放った。



「では、お邪魔します」

玄関に足を踏み入れると、俺はピンときた。
みそのは何事もなかったかのように
スリッパを用意してはいるが…

みそのが動作するたびに香る…
手洗いもままならなかったみそのの
…体に…指先にこびりついた匂い…。

誤魔化すように笑顔を俺に向けるが
間違いない…この女…今の今まで
男を家にあげる前の準備運動していたな。
この雌臭さ…俺の鼻は誤魔化せないぜ…。

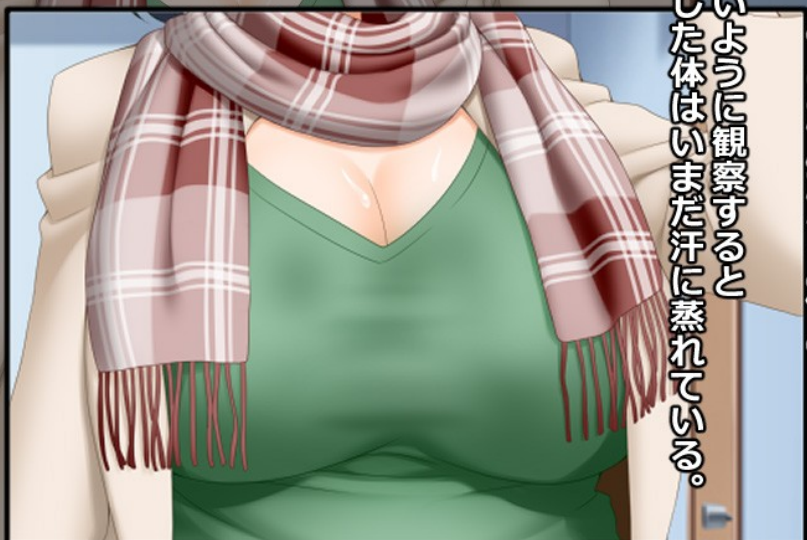


(ククツ…大方、旦那以外の男に
余計な気心を持たないように
事前に自分で発散していたんだろっが…)

気づかれないように観察すると
ぼっちやりした体はいまだ汗に蒸れている。

(感じやすい体を作って待っていてくれて
仕事がいややすくなったぜ…クククツ)

滲む汗がはち切れそうな肉を吸い付かせ
ぼちゃ特有の爆乳やデカ尻が
俺の目の前にこれでもかと強調されていた。



(昼間からオナニーするほどの欲求不満さが丸々太ったフォアグラボディをより一層ご馳走として輝かせてやがる…)

雌の香りの目を細めるム、ムそのは
気分を書いたのがム、ムそのの様子を窺う。

「あ、あの、スリッパ…どうぞ…」

「ありがとうございます…しかし奥さん大丈夫ですか？少々お顔が赤いようです。体調が優れないなら日を改めましょうか？」

「へ、え？ あいや、だ、大丈夫です…！
ですので…き、気にせず上がってください」

ドキッ

この焦り方、じつじつと確定のようだな…。

少しからかってやるよ、みそのは
そそくさとリビングの扉を開いた。

(ここが現場…ではないようだな)

匂いを確かめたらさみそのが頭を下げた。

「あ、あの、さつきは本当にごめんなさい。
ピンポン聞こえたけど、間に合わなくて…
あ、改めまして、モニターの予約をした
みそのです。よろしく願います…」

「いえ、お気になさらずだ。主婦の皆さんが
何かとお忙しいのは存じておりますので…
奥さんが汗していた理由もお察ししますよ」

「え、えっと…あ、ありがとうございます」

「では早速ですが、ダイエットに関して手始めに少々質問をしたいのですが…」

「は、はい、大丈夫です。お願いします」

「ありがとうございます。ではまず…アンケートで糖質制限ダイエットの失敗談に触れていましたが、具体的にそれが今回の応募に繋がった理由を聞かせていただいてよろしいですか？」

「あ、はい…実は半年前から、主人と糖質制限を始めてみたんですけど…」



「主人には、効果があるみたいなのに
私は全然効果が見えなくて…
私も主人もお肉が好きだから
お肉以外には気を遣って
炭水化物を抜いて、野菜多めにしてるのにな
なぜか主人ばかり痩せていって…」

「それで奥さんも焦りを感じた、と…」

「あ、焦り…うん、焦りなのかも…」

「何か思い当たることでも？」

「は、はい…えっとですね…そのお…」



「うちの人、スリムになったおかげか
職場でも評判がよくなったみたいで…
お客さんからも人気が出たそうなんです…」

「それは女性客から、ですか？」

「え、ええ…それに、若い女子社員にも
痩せた秘訣を聞かれてるって調子乗って…」

「それは奥さんに火をつけちゃいますね」

「そお、そおなんです！ そればかりか
最近口を開けば、お前も早く痩せろって…
だから私、悔しくて、絶対痩せたいって
思っで、ネットで調べてたんです！」



「いつも昼間からネットばかり見てるから
痩せないんだ〜とか、調子に乗って
私の生活態度まで口出すんです、あの人！」

だから、絶対に痩せて見返してやるって
ネットで調べてたら、トシさんのサイトに
行き着いて、プロに相談したらって思っ
て思い切って応募してみたんです！」

（大方、運動もせず乙女エロサイトで
オナニー三昧な昼下がりにとどろきださう…
そりゃ痩せるわけねえなあ、クククッ…）



しかしどうやらこの女、綺麗になるより
旦那の鼻をへし折りたい、見返したいという
気持ちの方が大きいようだな…。

家から出ない運動不足が大きな原因だと
自分自身でも気づいているだろうに…。
だが、その負けん気な感情と
人頼みで痩せたい怠惰な心は
いくらでもつけ込む隙になる…。

今回はその旦那とすれ違った心の隙を
上手く利用させてもらおうかねえ…ククク。



「なるほど、よくわかりますよお。
同じ男性としての失敗談ですが
成果が出て注目を浴びるとつい調子に乗る…
それこそ周りが見えなくなってしまうので
当たり前の気遣いもできなくなるんですよ」

「そおつ、そおつ！ そおなんです！
…主人も前はそんな事なかったのに
今はモテ期キターって、私のごとなんか…」

「ハハ、モテ期ですか。それは奥さんは
聞き捨てならない心持ちでしょうなあ」

「あ、ごめんなさい、つい愚痴を…」



「いえ、構いません。私の顧客でも奥さんと同じ境遇の方も多くいますから……ですからお辛い気持ちもよくわかります。」

「あ、ありがとうございます。」

「トシさんって、優しいんですね。」

「本当、嫌味になった主人とは大違いです……」

「いえいえご主人ほどではありませんよ。ダイエットトレーニングで絶対に痩せて優しいご主人に戻ってきてもらいましょう」

「そ、そうですね……ハア、トシさんが旦那さんだったらよかったのに……な……んて」

優しくされて不満な旦那より俺の方が男性的優位に立つ……よし、第1段階完了だ。

「ではまず、この資料を見て頂けますか？」
事前に頂いていた奥さんのデータから
似たような背格好の実例をお持ちしました」

上機嫌のみそのにあらかじめ用意しておいた
男女の比較資料と、プログラムの過程で
太った女性が痩せていく写真資料を見せる。

「あ、身長も体重もよく似てます…
うわあ、男女でこんなに差が出るんですね」

「実は女性より男性の方が筋肉量から
体重が落ちるペースが早いです。
なので奥さんには、私とマンツーマンで
じっくり無理のないプランを提案します」



「は、はい。マンツーマンなら、私も…
私もいつか、こんな風に痩せて…」

「はい。ですから奥さんも頑張れば
必ず旦那さんの様に…いえ、旦那さん以上に
痩せることが可能です。いかがでしょう、
私と一緒に、頑張ってみませんか？」

「は、はいっ！頑張りますっ、私っ」

「よかった、契約成立ですね。
では早速、旦那さんを見返すことを目標に
ダイエットプログラムを始めましょう！」

「はいっ…よろしくお願ひしますっ！」



鉄は熱いうちに打った。
俺は流れを殺さないように畳み掛ける。

「では、体験も兼ねて実践いきたいのですが
今、行っているダイエットの改善点を
少々探らせてください。まず、炭水化物を
抜いていると仰ってましたが、麺や芋類は
当然控えるようにしていますよね？」

「はいっ。ネットで調べた最小量にして
なるべく野菜を多めに、お肉も赤身主体の
脂の少ないお肉を食べるようにしてますっ」

「なるほど、完璧です。さすが奥さん」

「えへへ、それほどでもない」



「では、筋トレやウォーキングなど
適度な運動は取り入れてますか？」

「え、運動…えっと、そういうのは…
あまり…ほとんど…やってないです…」

「なるほど…糖質、炭水化物を控えるのは
素晴らしいですが、タンパク質を運動で
燃焼させないことが、糖質ダイエットの
失敗の原因かもしれませんね」

「ええっ、そうなんですか？」

「はい。せっかく摂取したタンパク質が
運動で脂肪と一緒に燃えてこそですから」



「で、でも主人は運動してないけど
メキメキ痩せて効果出てますよ？」

それは当然だ。旦那は外へ出勤している。
ネット依存の引きこもりとは1日の運動量が
当然違う…だが、その事実は置いといて…。

「糖質制限は燃焼する筋肉量が重要です。
先程のデータの通り、女性は男性と比べて
圧倒的に筋肉量が少ないですからね。
運動して筋肉をつける必要がありますよ」

「うええ、運動かあ…苦手なああ…」

「ですから私が無理ない運動を提案します」



「そうですね…楽しんでダイエットなんて…
…ハア、やっぱり運動が大事なのかあ…
大好きなお米もパンも我慢してるし…
やっぱり苦手の運動しないのが原因なのかあ」

「そんなに落ち込まなくても大丈夫ですよ。
今回、私が奥さんにお勧めするのは
そんなにハードじゃない運動ですから」

「え、そうなんですか？」

「ええ。むしろご結婚されてる方なら
皆さんが普段から実践している
とても楽しくスッキリする運動ですよ」

「楽しくて、スッキリ？ 私も知ってる…」



「うくん、そんな運動、普段してたかなあ」

「毎日ではない方もいますけどね。
ですがこの運動方法なら、女性は痩せて
綺麗になることも実証されていますし
心も満たされて余計な食欲も抑えられる
データも、医学的に証明されています」

「痩せて綺麗に？それに食欲も？
そ、それって、一体どんな運動なんです？」

期待に瞳を輝かせるみその。
それを尻目に俺は微かにほくそ笑んだ。

「その運動、それは…セックスです」



「セ、セックスって…え？ ええっ？」

「女性にはあまり知られてませんがセックスは消費カロリーが高いんですよ。1回のセックスで男女差はありますが女性は平均69キロカロリーといわれ前戯を含めれば100キロカロリー程です。これは15分間のスロージョギングに相当するカロリー消費になるんです」

淡々と語る俺の前でみそのは口裂け。

「そ、そうなんです…で…でもみその…」



「最初は抵抗があるかもしれませんが
今のお体で辛いジョギングを始めるより
セックスは効率よくカロリーを消費できる…
セックスとは主婦にお勧めの療法なのです」

恥じらいもなく連発されるセックス発言に
当のみそのの頬はもう真っ赤だ。

「いいえ、でもでも…あの、その…
今日会ったばかりの方と、セックスは…」

「え？アハハ、もちろん私とではなく
ご主人に協力頂いて、という意味ですよっ」



「えっ？あ、そ、そおですよね！
わ、私うたら、何を想像して…ア、アハハ」

「まあ奥さんほど可愛い方なら、その想像に
乗らないのも男が廃るんでしようけど…」

「えっ……！」

「ああ、いえ、失言でしたね…
ご主人に協力して頂けるのが一番ですから」

「あ、うん…でも、その…協力してくれるかな…
…お恥ずかしながら、最近、ちよっと…ね」

そうだろう。だから唇間からオナー…ニ味。
わかってるから振ってやっってるんだよ…。



「では、どこを鍛えれば効果的かをレクチャーしますので、お体を少々拝見して少しお体を触らせて頂いてもいいですか？」

「え、ええ。そうですね、やり方だけ…」

「ありがとうございます。それでは、服を脱いでいただいてよろしいですかね？」

「ふ、服を、です、か…?」

「数値データより実際に見て触った方がより効果的な攻め方を考慮できますからね」

「そ、それって、どこまで…」

「できれば全部、全裸が望ましいですね」



「でも、裸は、ちよつと…」

「お気持ちはごもつともです。しかしこれは
トレーニングを効果的に行うために
必要なプロセスなんです。他の方も
通ってきた道です。どうか勇気を出して…」

「う、うん、そう、ですよね…」

「私を信用してください。一緒に旦那さんに
一泡吹かせてやりましょうよ、ね？」

「は、はい…トシさんがそう言うなら
わ、私、頑張ってみますっ…！」



俺にさせられ寝室で脱ぎ始めたみその。
だがその手は上着を捲ったところで止まる。

「うっ、やっぱり恥ずかしい…」

堪らない下乳をはみ出しながら戸惑う姿は
俺の男心をピクリと脈動させた。



「大丈夫ですよお…ここはご自宅です…
それとも、何かやましいらぬ想像でも…」

かおあ
「いいえ、トシさんのことは信用して…
すすみません、ぬ、脱ぎ、ます…だから
ちよつとだけ、向こうを向いてください」

「ええ…準備ができたなら教えてくださいね」

そう言って俺が背を向けると、しばらくして
思い切った衣擦れの音が聞こえた。

「はい、はいですよ…でも、あまり見ないで」

振り返ることは買つ白な肉の山脈…
そしてペーピングの毎が2つ実っていた。

「おお、綺麗な肌です…魅力的だ…」

「そ、そんな…は、恥ずかしいです…
それに、今の私に魅力なんて…」

「いえ、魅力的ですよ。それに痩せれば
今以上にもっと魅力的になれる…」

「…う、トシさん…う、嬉しいです…」

「ククッ、いえ、本当のモノですから…」



みそのが期待が膨らみ、しびりな腫は
今にも目を瞑り口付けを求めてきたようだ。

「トシさん…わ、私…」

「では、身体チェックに移りましょうか」

「えっ、ト、トシさん…っ」

期待に反し、ロマンもへったくれもなく
みその目の前で俺も服を脱ぎ始める。

「ああ、驚かせて申し訳ありません。
肌を合わせた方が、セックストレーニングの
最適な方法が見つつけやすいものですから…」



みそのが期待しているのを察したまま
俺はあえて男の体を見せつける。

「あ……あ……」

セックスへ向けた口実に過ぎない行為を
混乱しながら食い入るように見入るみその。

「じゃあ、その上着も脱ぎまじようか……
奥さんの綺麗な体……全部見せてください……」

「え……あ……はい……」

みそのは流されるまま上着に手を掛ける。
褒められ慣れない男日照りな人妻は
甘い言葉に酔い、まんまと俺に身を委ねた。



俺は背面座位の体勢でみそのを跨らせ
身体チエックと称して乳房に触れた。

「ひあつ、あつん……
やだっ声……ん、んっ」

「声は気にせず出して下さい。
発声はカロリーを多く消費しますから」

「ん、ん、ん……んっ……あっ……」

乳首を擦る様にして胸を揉んでやると
俺の上でみそのの全身の肉が震えた。

「んっです……もう燃焼し始めてますよお……
な、も、もっとなんて声を出して感じてみましょ」

びん

びん



「それっ、なら…あっん…ふああっ
わ、かり、んあっ、わかりまし…たああん」

消費カロリーと求める快樂の「石二鳥…
みそのは恥じらいながらも声をあげ始めた。

「はあっ、あんっ…はああ、お、おっぱいい
あっ、あんっ…だ、だめ、キモチ、んんう」

クニクニと指で乳首を転がしてやると
まよひのほろりとした声を響かせた。

「ああっ…乳首いっ…ん、ふ…んああっ…」

「ククッ、お好きなんですわねえ、乳首…
うすすすよお、お、さうと感じたまま声出して」

「は、いらんっ…んあっ、ああ、好きっっ」



「あ、あつ、乳首、もつとしてっ…はあっ
乳首、好きな、感じるのぉ…あ、ああっ」

「敏感なんですなぁ…ほら、もっつっすの
敏感なところも、濡れてきてますよぉっ」

「うう…あ、あううっ…いい、言わないでえ」

俺が来る前にオナニーしていた飢えた体は
あつという間に受け入れ準備が整っていた。

「随分早い反応ですねえ…なぜです？」

「ん、く…そ、それは…それ、はあ…」

「恥ずかしがらずに言ってくたさいよ…
その発声もカロリー消費になりますから…」



「ハア、ハア…お家に、知らない男の人…
お、男の人を上げるの、初めてだからあ…
ハア、ハア…よ、欲情しないようにって、
そ、その…さつきまで、アレ、シててえ…」

「アレって何です？…さあ、恥ずかしがらず
言い放って、カロリーを燃やしましょう！」

「っ、ああ…オ、ナニ…1人で…オナ…」

「何です？ もっと大きな声で！」

「っ…1人で、オナニーしてましたあっ！」



「はい、よく言えました。いい声でしたよ」

「しゅっ…あ、ありがとうございます…」

「これで大体奥さんの趣向と責めどころはわかりました。あとは旦那さんと今晚から実践あるのみですね。ククッ」

「そんな…わ、私、もお我慢…んあっ…」

にゆるん…最後の言葉を聞き出すために俺は硬くなった肉棒で尻の割れ目をなぞる。

「ふああ…お、大きく、なってるっ…」

「ええ、私も男ですからねえ…
魅力的な奥さんと触れ合えば当然…」



見せつけるように前面に顔を出した肉棒を濡れた肉壁にゆっくりと這わせる。

「ふ、ふぐうっ……」

みその口から合意の言葉を言わせたい俺は勃起チンポを擦り付け焦らす。すると……

「ハア、あああ……い、挿れ、て……あうっ……」

「はい？何か仰いましたかあ……？」

「も、もお、我慢……んあっ、挿れ、てえ……」

「それは……セックスストレージングを
実践レクチャーして欲しいらとらうなとっ」

「は、はいいっ……だ、だから私と……っ
セ、セックス、して！今、ここ、でっ……っ……」



「ならそれを、ハッキリ言葉にして…」

「う…セックス、したいんですう…!!
だから、抜かないで…あなたのおちんちん
すつごくキモチいのお…硬くて熱くて
もっと、欲しい…主人のより、もっと…」

「ククッ、旦那より相性いいって…」

「ハア、ハア…う、うん…す、好きさ…」

「ククク…いいでしょう…ではこのまま
トレーニングを再開しましょうか…」

「は、はいっ、おお、お願いしますっ…」



「ではまず、奥さんは腰を上げ下げして
ナカから外からカロリーを消費しましょう。
騎乗位の要領で、できますね？」

「は、はい…ハア、ハア、頑張ります…！」

「ひとまずこのアラームが鳴るまで
ピストン運動を続けましょうか…
それでは…用意、スタート！クククツ」

「んんあっ…あっ、あはああんっ…！」

アラームをセットすると、みそのは不器用に
俺の肉棒を欲望のままに出し入れし始めた。



「Gスポット、好きなんですねえ…
マンツーマンの定期契約すれば、
好きな時に突いて差し上げるのですが…」

「あんっ…っ、しますっ、定期、契約っ！」

「ククッ、ありがとうございます…
ではイイところもわかったことですし
そろそろスピードアップしましょうか」

「は、はいっ…っ、んんあっ、あっ、あっ
はあっ、あうっ…っ、んっ、ふっ、ん、んっ」

悦びに声を震わせたみそのは、不器用なりに
へこへこと擦り付けるように腰を振った。



「あああつ…ハッ、ハッ、はああつ…!!
んっ、フウ、フウツ…っあ、あはあんっ!!」

とろけた表情で快楽に浸るみその。
俺の上で肉布団がぶるぶる震え、温かな
肉の沼へとお構いなしに俺を包み込む。

「んああつ、ぎもちい…んふっ、んふうっ
あつ、あつ、らめっ、あんん…っ!!」

パンツパンツパンツ

「あふあつ? あつ、あつ、ああんっ?」

調子に乗った雌ブタにはお仕置きが必要だ。



「ひああああんっ、激し…んひいっ！」

「さあ、次は動きと合わせていきましょう」

パンッパンッパンッ

「うめっ、うめっ…あっ、あっ、うあんっ」

「ほらほら、休んじやダメですよ。
徐々に体を激しい運動に慣らすんです」

あめあめ

パンッパンッパンッ

「んあああっ！そんなっ…できない」

「できますよ…ほら、リズムに合わせて
腰を上げ下げ…このリズムです…」

「あひいっ！ああっ、ひっ、ああんっ」



「じゃあ、そろそろラストスパートに…
一緒にフイニッシュ、キメまじょうか！」

パンパンパンパンッ…

「んあぁあっ…うあぁめええっ…
ひぎっ、ひぎいいいいっ！いぐいぐっ
んあっ、あっ、おぐらっ、おくらめええっ
あぁあっ、パンパンちめなのおおっ！」

「いいですよお、ぎゅぎゅっを締まって…
もっと方を込めて！ほら、せつとっ…」

「あひゃあひゃあ…もあひゃあひゃあ…」

あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ
あひゃあひゃあ



「さあ、ナカ出しフイニシム」ですー！
イキまじようー奥さんっ……ー！

パンパンパンパンッ……

「あああひいらいらいらっーナカ出しっ
んああっーあひっ、ああっ……んぐらっ

アッ
アッ
アッ

パンパンパンパンッ……

「ああっ、ああああっー……んぐらっ
あああっ、イぐっ、イぐらっ……んぐらっ
はああああっ、うめらめももめええっー
っあ！あっ！ああああっ……んぐらっ

んぐらっ！
んぐらっ！

んぐらっ！
んぐらっ！



ピロピロッ、ピロピロッ…
アへ顔絶頂のみそのが余韻に震えていると
セットしておいたアラームが鳴り響いた。

「おや、ちよつと時間ですね…では、今日の
トレーニングはここまでにしてしまおうか…」

「んふうっ…はう、あああ…」

んんん…

んんん…

んんん…

んんん…
んんん…

んんん…

んんん…

んんん…

切なげに、名残惜しそうに漏れる声…
不意に引き抜かれ、余韻にヒクつく肉襞は
物欲しそうに繰り返しパクつきながら
俺の精液まじりのよだれを垂らす。



立ち上がりアラームを止めると…

「んちめえ…はむっ、ちゅぢゅ…もっとなっ、ふうっ…もっとなっ、もっとなっ…」

みそのは垂れ流したままその場に跪き
かいたがいく俺のチンポを舐め始める。

んっ
ちゅっ
ぢゅっ

ちゅ
ちゅっ
ちゅっ

「んっ、ふう…れっ…ちゅほっ、すっ…
お願い…まっ、やめなれ…んっ…
もっとなっ、もっとなっ…ぢゅっぢゅっぢゅっぢゅっ」

欲望のタガが外れたみそのの単純な思考は
完全に脳内を快楽に支配され
上目遣いに俺を見ながら腰をくねらせる。




救いを求めるような哀願の目を見下し
俺は堂々とほくそ笑んだ…。

「ククク…奥さん…まだ時間もありませんし
別のトレーニングも試してみませんか？」



「んふっ、ふ、ふわいつ…！…れろ、ぢゅっ
お願い、しまふうっ…あむ、んっ、じゅっ
もお、おマンコ…れき上がったまふからあ」

「クククツ…すっかり雌フタの顔だなあ…
どうも簡単に堕ちるとは…気に入ったぜ…」



その日、俺たちは旦那が帰るギリギリまで
寝室が2人の匂いでいっぱいになるほど
様々なトレーニングをこなし尽くした。

セックスダイエットにハマり込んだみそのは
出しても出しても跨がり勃たせようとする。

1日にして立派に腰振りのデキる
イイ雌ブタに仕上がったものだ。

その調子ならすぐに痩せて卒業できる…
と嘯くと、切なそうに瞳を潤ませ
首を振りながらセックスに没頭するほど…。

その後も定期契約を言い訳に
放置されては体重が落ちないと言って
たひたび俺に連絡を寄越すようになった。

今では多少の罵声も冷たさも快樂と感じる
立派な俺専用の雌ブタ肉便器だ。
その関係が続けたいがゆえ、卒業回避のため
みそのは前よりも食べる様になったらしい。

「ウフフ…トシさあん、じゃあ今日も
セックストレーニング、お願いしまあす…ん」

嬉しそうにアラームをセットするみその…。
肉の園は俺を包み込み、今日も爛れた快樂へ
ずぶずぶと沈みこんでゆくのだった…。

